

「ままごと」の新聞

newspaper of
mamagoto

「ままごと」の新聞」は、
柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が
不定期に発行する活動報告紙です。
発行日：2012年6月
発行元：ままごと

「街と演劇」

小倉と

北九州芸術劇場プロデュース

『テトラポット』 柴 幸男 Yukio Shiba

過去の公演について語るとき、いつも恥ずかしくなったり、苦しいような気持ちになります。なんだか、昔の恋人との日々を話しているようです。些細なことも大きな後悔につながったり、過剰な憧憬につながってしまった。過去の出演者たちは、かつての恋人のようだし（男女問わず）、劇場や稽古場は、デートをしたお店や同棲したアパートのようです。我ながら気持ち悪い。あと、実生活で同棲したこともないのに、だから、大抵の公演は、そうですね、1年ぐらいいして、あれは良い日々だったなとしみじみ思い出すので、今、北九州のことを語るの、はやっぱりする。でも、新しい恋をする

ためには、過去を精算し反省することも大切だと思ふので、むしろありがたい作業だと思ふことにします。しかし、もうちょっとだけ脱線するのならば、なぜ僕にとつての過去の公演は、すべて「失恋になつていのか、公演の成功（それもよくわからないけど）」とも、あまり関係なく、どこまで行っても、僕にとつて演劇活動は、失恋活動です。

北九州に、滞在していたのは、今年の1月頃から2月末の約2ヶ月。僕は、その間、一度も東京には帰らず、北九州で過ごしました。ほぼすべての時間は稽古と執筆に費やされ、想像するだけでも、天国みたいな日々だったと記憶し

ています。

北九州で覚えている場所を、思いつくまに。一番、記憶に残っているのは、モスバーガー。なんとまあ、がっかりの出だしですが、本出だからしょうがないです。多少、箸をつけるなら、ただのモスバーガーではありません。このモスは、普通のモスと違い、蔵を改装したような佇まいの店舗をしており、まあ、そんな感じですね。稽古は北九州芸術劇場の稽古場でお昼から夜の8時まで。稽古前と稽古後はいつも、僕はこのモスバーガーにいました。市場と商店街から、一本横の、海へと続く紫川のほとりのこのお店で、僕は、毎日、コーヒを飲みながら、台本を書き、メールを読み、ラジオを聞き、ただぼーっとしたり、していました。印象深かった風景があります。北九州には雪がよく降ったのですが、積もることは一度もなく、粉雪が、強い風の中、舞い散るだけでした。僕は、よくこの粉雪を、モスのガラス越しに眺めていました。たぶん、そのときに、粉雪を舞台上にも降らせたいと思つたでしょう。「テトラポット」のラストシーンには、この粉雪のように、舞い散るだけで積もることはない、マリンスノーが、降り注いでいました。

深夜まで台本を書いたあと、本当にちゃんと

書いたあと、行つていたのが、このモスから100メートルほどにあった屋台でした。北九州にも、博多のような、屋台が、少しかあって、全部、おでんの屋台なんです。お酒はなく、おはきがあります。その中に、とんこつラーメンを出している屋台があって、そこで夜食を楽しむのが数少ない喜びのひとつでした。つて、ちよつと書いておぼろげすぎました。冬の夜、ビニールの壁しかない屋台の中は寒かつたはずですが、いま思い出しても、おでん鍋のまわりは暖かく、となりのカップルや、酔ったサラリーマンや、大学生たちの、小倉の訛りが耳に心地よかつたことが浮かびます。

いつだって俳優たちとお酒を飲むのは、それほど好きではなく、この北九州でも行つたのは1回か2回だけ。僕にとつて、彼らは、ずっと作品の世界の中の人たちであつてほしかったのだと思ひます。でも、彼らは、たぶん、生きていける人間としてつとつと接してほしかったんじゃないかと、今では思ひます。最高の作品を用意することだけが、僕にできる誠意だと思つて毎回、努力してはいたのですが、それが叶うことなんてほとんどなくて、だから、いつも失恋のように感じるのかもしれない。あと努力の方向が間違つてるような気がします。僕は、もつと俳優に開いて、作品をつくらなくてはいけいではないか、そう考えはじめた、北九州の日々でした。

一番、気持ちの良かつたのは、稽古場へ向かう途中、紫川の川沿いの道を、自転車走っていったとき。紫川は、きれいな川とは言えませんが、川面に光が反射して、目の前には小倉城と海と、工場と、劇場があつて、それだけあれば幸せだと、このときの僕は思つていました。



夜中までやっている小倉の屋台



蔵みたいなモス、中は普通



紫川と左に見えるのが劇場



劇場へと向かう途中にある市場

Yukio Shiba

82年愛知県出身。青年団演出部所属。日本大学芸術学部在学中に『ドドミノ』で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年『わが星』にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞、同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。

from 福岡

「私と演劇」

寺田剛史（飛ぶ劇場）

9年前、北九州芸術劇場が出来ました。全国から沢山の演劇人がココ北九州に来るようになりました。柴さんとの出会いもココでした。

私がまだ20代前半の演劇を始めたばかりの頃、「金が無からうが野たれ死にそうだろうが演劇をやる」と今思えば意味不明な闘志に燃えていました。

しかし、30という年齢を境に僕の周りに演劇から遠ざかる人が増え、劇団を退団する人との別れもありました。そんな頃から「何があっても演劇をやる！」から「演劇を続ける為には何をすべきか」と変わりました。そう思うようになるまでに16年。

そして永く演劇を続けると、嫌でも「寺田さん」「寺田先輩」と言われるようになってしまつていきます。とつても嬉しい事ではありますが同時に責任感も出てきますよ。

北九州の演劇を背負つていかなければならぬという使命感？、湧いてきますよ？

結婚もしました。子供もいます。裕福な生活ではありませんが、家族を養いながら演劇を続けています。今は。

そんな生活環境があつてもありがたい事に、北九州を拠点に北九州では無い場所に俳優として呼ばれ、その土地に滞在し作品を作る事も時折あります。

そして私の活動が、これから演劇を続けて行く若者達へ、「何処に居たって演劇はできる」というメッセージと希望になつてくれれば良いな、と思ひます。

近年演劇も進化し続けているようです。その進化について行けなくなつた時、私は演劇をやめます。進化し続ける者が生き残る。大げさかともがきつとそうなのだと、今日では思ひます。



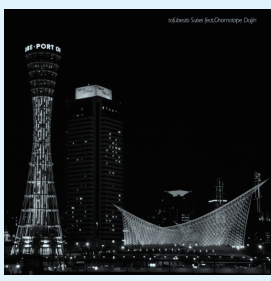
てらだ・つよし 76年福岡県出身。98年に「飛ぶ劇場」に入団。柴作品には『合唱交響曲わが星』『テトラポット』に参加。

「ハートのビート。」 vol.01

宮永琢生 制作

はじめまして。ままごと制作の宮永です。30歳です。スキュンソってゆーのやっています。お酒と音楽と猫が好きです。

さて、このコーナーでは、私が皆さんにぜひ聴いてもらいたい音源をご紹介させて頂きます。うん、なんでとが訊くな。音楽が好きなの。みゅーじっくらぶ。今号でご紹介するのはこの一枚。



オノマトベ大臣とトーフビーツ 『水星』

耳の早い人には既に知られた名曲。次世代トラックメイカーの最右翼「Totobears(トーフビーツ)」と盟友の会社員ラッパー「オノマトベ大臣」のエバーグリーンなメロウチューン。PUNPE氏のリミックスもヤバイ。2012年のムーブメントを牽引するのはこの二人かもしれない。

ちなみに本作はアナログ盤のみで発売。販売している「JETSET」でも発売しているので要注意。聴きたい人はYoutubeで。また、SoundCloudでも様々なリミックス作品が公開中。個人的には、リズムステップブループスの「matホテルオークラ、MKがオススメ。」
※http://www.jetsetrecords.net

Takano Miyunaga 東京都出身、プロデュースユニットZuQuZ (ズクオンズ) 主催

「いわきのこと」第1回

端田新菜 俳優

『わが星』のツアー・ゴール地点は、福島県のいわき市にある、いわき総合高校でした。そのとき出会った高校生と先生との、それから一年を、これからゆっくりに書き留めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひします。

2011年3月11日、わたしは岐阜県の可児市のウィークリーマンションから、『わが星』の旅の最後にみんなでいわきの温泉に行ったらいいんじゃないかと調べ上げた、いくつかのプランを朝一番に『わが星』メリスに流しました。可児での仕事が終わる3日前の朝でした。中島佳子ちゃんがすぐに「行こう行こう」と返信をくれました。

そのあとの強い揺れで、いわき公演は中止となりました。でも、わたしたちは、なんだかずっと、漠然と、「いわきには、行く」と思っていました。

そして本日に6月4日と5日、わたしたちはいわき地区に7校ある演劇部員を対象としたワークショップを行い、『わが星』本編を新しくアレンジし直した『いわきのわが星』を上演しました。いわきアリオスの今尾博之さん(今は新潟のりゅーとびあでお仕事をなさっています)、いわき総合高校のいしのみちこさんらのご尽力のおかげでした。

こんな風にして、わたしはいわきの高校生達に出会いました。(続く)



左から三浦俊輔、村田シゲ、大柿友哉。いわきアリオス前にて。

Nina Hashida 京都府出身、青年団所属、2011年ままごと加入、五反田団、ハイバイ、チェルフィッチュなどに出演。

「わたしの履歴書」一枚目

大石将弘 俳優

大石将弘。172センチ、59キロ。29歳、いて座、O型。奈良県に生まれて、18歳から大阪、大卒卒業してから東京に住んでいます。演劇をしています。役者、です。趣味は、歩くこと、ちょっと走ること、白米とビールをおいしくいただけるごはんを食べること。

これで、あとは特技と志望動機を書けばいい履歴書なんです。ここで筆がとまります。

どうなんだろう、真つ当に生きていけば、特技と呼べるもの一つやいくつかが、挙げられるのが普通ですか。そうでもないですか。どんなのそこそこつっていい。

特技の欄に何を書くのが、それが人生を大きく左右することはまあ滅多にないと思いますが、問題は、何を書くか、ではなくて、どんな顔して特技欄をやり過ぎせるかっていうことなんだと思ってるですね。何言ってるかわからないですね。すみません自分の話ですが、僕は空っぽの特技欄を締切ギリギリまで先延ばしにして、未だ捻り出したものに絶望して、暗澹たる気持ちで提出することになります。「ムーンウォークのできそこない」だの、「眉毛の間にすくしわが寄る」だの、お茶をたたく濁すことだけに苦心してきました。

このままではちょっと人生を左右しかねないと思っていて、精神的にも。特技欄との付き合い方という課題に直面している30歳手前の今の僕です。よろしくお願ひします。

Masahito Oishi 奈良県出身、2010年、ままごと加入、マームンツイン、田上ハル、などに出演。

編集後記

劇団でありつつも、メンバーそれぞれがそれぞれに、日本の何処かで活動している「ままごと」。そのそれぞれの活動の足跡を、新聞という形で残そうというのは、いかにも彼らしいと思うのです。次回第2号もお楽しみに。(熊井)

企画・編集=ままごと
構成=熊井玲
デザイン=西山昭彦

『朝がある』稽古場より

今は5月中旬。僕は、毎日、井の頭公園を歩きながら稽古場へと向かっています。犬の散歩をしている人、親子で遊んでいる人、池でボートに乗っているカッパル、緑の色と噴水と、光と、雲土の上を歩くのもとても気持ちいいものです。

井の頭公園の中にあるテニスコート事務所の一室が、稽古場です。ここは陽射しがほどよく当たり、猫が隣の芝生をよく歩いている。稽古時間はお昼の12時から夕方5時まで。この場所と時間は、今回の作品にとっても強く作用すると僕は考えています。

その稽古場で、今は数ページのテキストを、何周も、何回も稽古しています。例えば、そこにもいものを見ながら、そこにもいものに触れながら、近寄りたり、遠ざかったり、踏んづけたり、かさなったり、そして、歌にしたり、ないものを、あるように、あるものを、そこにあると実感できるように。それが今回の作品『朝がある』です。

柴幸男



ままごと+三鷹市芸術文化センター presents 太宰治作品をモチーフにした演劇 第9回

「朝がある」

2012年6月29日(金) - 7月8日(日) 三鷹市芸術文化センター 星のホール

作・演出：柴幸男 出演：大石将弘

TICKET (全席自由・日時指定・整理番号付)
一般 前売3,000円・当日3,500円 財団友の会会員 前売2,700円・当日3,150円
高校生以下1,000円(前売・当日とも)

	6/29金	30土	7/1日	2月	3火	4水	5木	6金	7土	8日
15:00	●	●	休	●	●	●	●	●	●	●
19:00	●	●	館	●	●	●	●	●	●	●
19:30	●	●	日	●	●	●	●	●	●	●

ままごとウェブサイト <http://www.mamagoto.org/>

チケット取り扱い
■ままごと(予約のみ)
<http://www.mamagoto.org/>
■チケットぴあ(Pコード419-257)
0570-02-9999 <http://t.pia.jp>
■カンフェティ
0120-240-540 <http://confetti-web.com>
■三鷹市芸術文化センター
0422-47-5122 <http://mitaka-art.jp>